

なつ・やすみ【夏休み】

子どもの成長に必要不可欠なもの
(一部のおとなにも必要不可欠)。

夏休み

ルーム

はやみねかおる



も く じ

オープニング
OPENING ————— 9

第1章 夏休みのはじまり ————— 29

01 夏休みルーム⇒登山ルーム ————— 45

第2章 シロクマの推理 その1 ————— 75

02 夏休みルーム⇒百物語ルーム ————— 83

第3章 シロクマの推理 その2 ————— 133

03 夏休みルーム⇒海水浴ルーム ————— 147

第4章 シロクマの推理 その3 ————— 179

インターバル
章 間 ぼくらは時間を必要としている ————— 193

04 夏休みルーム⇒宿題ルーム ————— 205

第5章 シロクマの推理 その4 ————— 227

エンディング
ちょっと長いENDING ————— 257

あとがき  ————— 290





シロクマ(探偵)

SNSの“ルーム”で探偵事務所『探偵ルーム』を開き、めったに来ない依頼人を待っている。現実世界では、精神科医。

ぼく(探偵助手)

ひよんなことから、シロクマの探偵助手になった。現実世界では、平凡な男子中学生。“ルーム”でのアバターは、キリン。



塾の特別クラス



やしろりか
八代利香

明るくてサバサバした性格。『夏休みルーム』で遊ぶことを提案する。



よしながきら
吉永綺羅

アイドルのような容姿を持つ。無口でクールな、すきのないタイプ。



やすだかずや
安田一也

小柄で元気いっぱい。利香とは幼なじみで、同じ中学。



かわばたまりお
川畑真理夫

インドア派でガリ勉タイプ。他人とは一定の距離を置く。

オ
ー
ブ
ニ
ン
グ

O P E N I N G

「^{みに}鬼ごっこルーム」



探偵



なぜ、被害者は、ドアから逃げなかったのか？ ドアには、鍵もかかってない。どのドアも、通るにはじゅうぶんな大きさがあった。なのに、逃げなかった。殺人鬼につかまえられるのに、逃げなかった。——これが、最大の謎です

探偵——シロクマのぬいぐるみが、ぼくらを見回す。『鬼ごっこルーム』

にいるぼくらは、だれも、なにも発言しない。

ぼくは、シロクマの助手だ。だから、こういうときは空気を読んで、次のように言わないといけない。

シロクマ先生は、その謎が解けてるんですか？

するとシロクマは、「ナイスタイミング！」という目をぼくに向けてから、不敵に笑う。……いや、実際は、シロクマのぬいぐるみなので、笑ったように見えただけなんだけどね。



ぼく

そして、シロクマは、指をのぼすと（正確に書くと、「ぬいぐるみの腕をのぼすと」）、言った。



探偵

わたしには、謎とも呼べないような、簡単な謎だよ

胸を張るシロクマ。



探偵

被害者は、ドアから逃げたかったが、できなかつた。そして、そのことを知っていた犯人は——

シロクマが、指（正確には「ぬいぐるみの腕」）を、あるアバターに向ける。



探偵

あなたです

さて——。

ここまで書いて、読者のみなさんが、ついてきてくれるか不安になった。

だから、自己紹介を兼ねて、状況説明をさせてもらおう。

まず、ここは、ルームの中の1つ——『鬼ごっこルーム』だ。えっ、「ルーム」ってなんだ？」って？

……まいったな。そこから説明しないといけないのか。

ルームっていうのは、最先端のSNS。きみたちが使っているツイッターやライン、インスタグラムのようなものの

進化形だと思ってほしい。

交流系のSNSなので、ホストが、あるテーマを持った部屋を設置し、そこへゲストを招待する形になっている。

結構なお金がかかるので、ぼくのような中学生がルームを開くのは難しい。

いろんなルームがある。

何時間むだ話ができるか挑戦するためのルームとか、アマチュア映画を撮影するためのルームとか——。

1人ではできないボードゲームをしたり、たくさんの人を集めて人文字を描いたりしたルームもある。

ドミノ倒しでギネス記録をぬりかえようというルームもあった。28万個のドミノを並べたのだが、SNSでの記録ということで、ギネスに認められなかった。

一時的なものではなく、ずっと開かれているルームもある。そこでは、何年間、しりとりを続けられるか実験していたりもする。

ぼくらが今いる『鬼ごっこルーム』は、鬼ごっこが好きな人たちが集まるルームだ。

ルームに入ると、アバターとして、ぼくらの姿はぬいぐるみになる。ちなみに、ぼくのアバターはキリン。

探偵はシロクマだ。

なんだ、探偵って？

そういう声が聞こえてくるので、説明しよう。

シロクマは、探偵だ。そうはいつでも、現実世界の探偵じゃない。ルーム内での探偵だ（現実世界では、精神科医という仕

事を持っている）。

シロクマは、ルームで起こる事件を解決するために、探偵事務所『探偵ルーム』を開いた。

探偵ルームに、パスワードは設定されていない。だれでも入室することができる。

ぼくは、シロクマの助手。現実世界では、平凡な男子中学生だ。そんなぼくが、どうして探偵助手をしているかというところ……。

まあ、いろいろあったんだよ（くわしく知りたい方は、ぜひ『奇譚ルーム』を読んでもらいたい）。

とにかく、シロクマは探偵で、ぼくは探偵助手だ。

めったに依頼人は来ないが、これまでいくつか事件を解決し、ルーム内では少し名前の売れた存在になっている。

そして今回の事件は、『鬼ごっこルーム』で起きた“非密室殺人事件”だ。

『鬼ごっこルーム』では、追いかける鬼になりたい人は『殺人鬼』、逃げる役をやりたい人は『サバイバー』として登録する。

ほかのルームとちがって、登録にあたっては、厳しい審査がある。性別、年齢、職業、家族構成、資産、未成年者の場合は保護者の承認——。これらすべてを正直に申請し、認められないと、登録することができない。

登録が認められれば、殺人鬼は色とりどりの鬼のぬいぐるみ、サバイバーはウサギのぬいぐるみになる。

ルームで鬼ごっこしても、おもしろいの？ 真剣にやっても、

しょせんSNSでの遊びでしょ。現実での鬼ごっこのほうが、スリルあるわ。

こんな意見を持つ人がいるかもしれない。

……バカなことを。

『鬼ごっこルーム』の鬼ごっこは、現実のものより、はるかにスリリングだ。

このルームの入室用パスワードを手に入れるには、50万円払わないといけない。そして、殺人鬼として登録して24時間以内にサバイバーをつかまえたら、賞金として100万円が手に入る。逆に、サバイバーとして登録して24時間逃げきれば、100万円が手に入る。

逃げきれなかったサバイバーや、24時間たってもつかまえられない殺人鬼は強制退室になる。そして、二度と鬼ごっこルームに入ることはできない。

こんな大金が動く鬼ごっこルーム。不正が行われないう、たくさんの監視カメラが付けられている。

なのに、事件は起きた。

鬼ごっこルームには、ドーム状の部屋がアリの巣のようにつくられている。

サバイバーは、ドーム状の部屋から部屋へ逃げる。部屋には4つから8つのドアが付いているが、鍵はかけられない。

ドアの大きさは、さまざま。

部屋が大きいからといって、ドアも大きいとは限らない。

事件が起きたのは、『ふりだし』と呼ばれる部屋。登録を終えた殺人鬼やサバイバーが最初に入れられるところだ。この部屋には、ドアが8つ付いている。

まず、ウサギの-avatarになった3人のサバイバーが『ふりだし』に現れる。サバイバーは、すぐに好きなドアから逃げる。どのドアも、高さも幅も1メートル以上あるので、身長が80センチもないウサギの-avatarは、どのドアからでも出ることができる。

サバイバーが現れてから5分後、殺人鬼3匹が現れる。

殺人鬼は、サバイバーがすでに『ふりだし』から逃げてしまっていることを知っているの、あせらない。

だが――。

3匹の殺人鬼が『ふりだし』に現れたとき、1人のサバイバーだけが、残っていた。まるで、出口のドアが見えないかのように、うろうろしている。

3匹のうち、2匹の殺人鬼は、すぐに動けなかった。ただ1匹だけが、うろうろしているサバイバーに飛びかかり、あっという間に首筋にかみついた。



つかまえた

オニ1

サバイバーにかみついたまま、その殺人鬼がつぶやいた。

ぐったりしたウサギの-avatarが消える。

次の瞬間――。

鬼ごっこルームに警報音が鳴り、時間が止まる。

不正行為の疑いがあります。すべての-avatarは、鬼ごっこを中断してください

空中にプレートが現れ、警告文が浮かび上がった。

そして、ぼくとシロクマが呼ばれたわけだ。

本来ルームに入れるのは、ホストと、招待されたゲストだけだ。でも今は、捜査のために、ぼくとシロクマも特別ゲストとして招待されている。



ホスト鬼

いったい、どういうことなんでしょうか？

赤い鬼のぬいぐるみの上に、ふきだしが浮かんだ。

ルームでの会話は、キーボードやマイクを使う。入力した文字や音声、ふきだしで現れるようになっているのだ。

そして、各自のタイピングや口調、心拍数、声の大きさなどからルームのAIがふきだしを書く。

赤い鬼は、鬼ごっこルームのホストだ。胸には『ホスト鬼』と名札がぬい付けられている。

『ふりだし』には、8体のアバターがいる。

ホスト以外には、殺人鬼のアバターが3体。青鬼のぬいぐるみで、それぞれ胸に『オニ1』『オニ2』『オニ3』の名札が付いている。このうち、サバイバーをつかまえたのは『オニ1』の名札を付けた殺人鬼だ。

そして、ウサギのアバターが2体。『ウサギ2』『ウサギ3』の名札を付けている。この2体は、逃げていたのだが、呼び戻されたのだ。つかまえられて、すでに消えているウサギには『ウサギ1』の名札が付いていた。

あとは、ぼくとシロクマだ。



ホスト鬼

本当に、不正行為なんでしょうか？

赤鬼のふきだしに、シロクマは反応しない。

さっきから、ドアの大きさを調べたり、殺人鬼やサバイバーの登録データを読んだりしている。



オニ1

いいかげん、鬼ごっこを再開してくれませんか？

『オニ1』の名札を付けた殺人鬼のふきだしが現れる。



オニ1

わたしは、ウサギがうろろうしてたから、つかまえた。それだけです

それでも、シロクマは相手にしない。

ぼくを『ふりだし』のすみに呼び、チャットモードで聞いてきた。チャットモードの会話は、ほかのアバターは見ることができない。



探偵

『ウサギ1』の登録データを調べて、なにかわかったかい？

ぼくは、ホストの赤鬼から借りたデータを見直して、答える。

気になる点が、2つありました



データに書かれていた通院歴を見せる。

1つは、最近になって『ウサギ1』が、眼科に通っていることです。目が悪くなったから、ドアの大きさがわからなくて、逃げる（に）ことができなかったのではないのでしょうか？

シロクマは、首を横にふる。



探偵

もう1つの、気になる点は？

眼科の入っている病院に、『ウサギ1』をつかまえた殺人鬼（ころしに）『オニ1』が勤めているんです。もっとも、眼科医ではなく、精神科医ですけど——



探偵

なるほどね

軽くうなずいてから、シロクマが聞いてくる。



探偵

きみは、不正行為（たふごう）があったと思うかい？

殺人鬼『オニ1』と、つかまったサバイバー『ウサギ1』は、仲間だったのではないのでしょうか？

『ウサギ1』は、わざとつかまって、『オニ1』に賞金を手に入れさせる。そして、あとで半分もらう——こんな約束をしてたんだと思います

すると、シロクマはため息をついた。ぬいぐるみのアバターがため息つくなんておかしいと思うんだけど、そうとしか思えなかった。



探偵

100万円の半分は、いくらだね？

50万円です

ぼくの答えに、シロクマは「正解」というように、うなずいた。



探偵

つまり、『ウサギ1』のサバイバーが手に入れる金は、50万円だ。一方、『鬼ごっこルーム』に登録するには50万円かかる。ということは、差し引きゼロで、『ウサギ1』には、もうけがないんだ

それだけ言うと、ぼくの相手はしてられないというように、みんなのところへ戻る。

そして、みんなのまわりを歩きながら言った。それが、冒頭のシーンになる。



探偵

犯人は、あなたです

シロクマが指さしたのは、サバイバー『ウサギ1』をつかまえた殺人鬼『オニ1』だった。

『オニ1』は、首を横にふる。



オニ1

言いがかりだ！ なんの証拠があって、わたしを犯人あつかいするんだ！

そのふきだしから、『オニ1』の怒りが伝わってくる。シロクマが聞く。



探偵

なぜ、『ウサギ1』は、ドアから逃げなかったのでしょうか？ その理由を、あなたは知ってますね？



オニ1

わたしの知ったことではない。きっと、殺人鬼を見て怖くなり、動けなくなったんじゃないか？



オニ2

いや、そうじゃない

『オニ2』のふきだしが現れる。



オニ2

おれたちが『ふりだし』に現れたとき、『ウサギ1』は、うろうろ動いていた。決して、動けなかったわけじゃない



ウサギ3

ぼくも不思議でした

今度は、『ウサギ3』のふきだしだ。



ウサギ3

ぼくらサバイバーは、少しでも早く『ふりだし』から出たかった。それは『ウサギ1』も同じです。『ウサギ1』は、ドアに向かって走ったのに、急に足が止まった。となりのドアに行っても、同じ。ドアから出ない。不思議でしたが、かまってるわけにもいかないので、そこまでしか見てませんけど……

満足そうに、うなづくシロクマ。ドアの前に行くと、発言する。



探偵

ウサギのアバターの大きさは、80センチ程度。じゅうぶん、ドアを通り抜けられる大きさです。でも、『ウサギ1』には小さくて通れなかったのです

え……？

ぼくには、シロクマの言ってる意味が、わからない。80センチの大きさのアバターが、どうして1メートル以上の高さや幅があるドアを通れないっていうんだ？



ウサギ2

おかしいですよ。必死で逃げないといけないサバイバーが、通れるドアを通らないなんて——

『ウサギ2』のふきだしが現れる。ぼくと同じことを感じている。

『ウサギ3』のふきだしが続く。



ウサギ3

ぼくも、そう思いますよ。不思議に思っていないのは、シロクマ探偵——あなただけです

すると、シロクマは指をチッチッチとふった（でも、ぬいぐるみなので、指ではなく、腕をふったようにしか見えない）。



探偵

もう1人、いますよ

そして、『オニ1』を見る。



探偵

あなたも、わかってますね？



オニ1

……なぜです？



探偵

あなたが、現実世界で精神科医をやっているから
です

ぼくは、口をはさむ。

どうして精神科医だったら、『ウサギ1』がドアを通れ
なかったわけがわかるんです？

また、シロクマが「ナイスタイミング！」という目を、ぼく
に向ける。そして、みんなを見回してから言った。



探偵

『ウサギ1』が『アリス症候群』だったからです



探偵

『不思議の国のアリス』という本を、ご存じで
すか？

シロクマが、みんなに聞く。答えを期待してないのは、すぐ
に説明しはじめたことからわかる。



探偵

アリスという少女が、不思議の国で体験するさま
ざまなできごとが書いてあります。その中には、
薬を飲んだアリスが、大きくなったり小さくなっ
たりするエピソードが出てきます

みんな、だまってシロクマの話の話を聞いている。



探偵

それにちなんで、『アリス症候群』という名前が
つけられました。この患者は、自分の体やまわり
のものが、異常なほど小さかったり、反対に大き
かったり感じてしまうのです。この症状にかかっ
ている者は、視界にゆがみをとまなうことが多い
です。そのため、『ウサギ1』が眼科医にかかる
のは自然なことです

シロクマが、『オニ1』を見る。



探偵

『ウサギ1』が通っていたのは、あなたが勤める
病院です。あなたが、どのようにして『ウサギ
1』と知り合ったのかはわかりません。また、ど
うやって鬼ごっこルームに参加させたのかもわか
りません。ただ、1つだけ言えるのは、あなたは
『ウサギ1』が『アリス症候群』だと気づき、え
ものとして利用することを思いついた。——そう
ですね？

気のせいだろうか、『オニ1』の体が細かくふるえているよ
うに見えた。



オニ1

証拠は？ 証拠を見せてみる！

しばらくして、『オニ1』のふきだしが現れた。

すぐに、シロクマのふきだしが現れる。



探偵

証拠？ それがなんだというんです？ わたしは、探偵。ルームで起こる謎を解くのが仕事です。証拠を集めたり、裏付けを取ったりするのは、ほかの者がやるでしょう。特に、鬼ごっこルームは巨額が動くルームです。不正に賞金が支払われないよう、運営側が必死で証拠を探すでしょうね

この言葉に、『オニ1』の首が、ガクリと折れた。それはまるで、アバターの生命が消えたかのようなだった。

シロクマは、そんなようすを見てもなにも変わらない。両手を大きく広げると、ふきだしが続く。



探偵

そして、ここはルーム。現実世界ではありません。精神だけが集う場所。まさに、わたしにふさわしい世界だと思いませんか？

キリキリという笑い声が聞こえてきそうな、シロクマのふきだし。

ぬいぐるみのアバターなのに、背筋がゾワリとする。

探偵は、謎を解決する。その後、平和が戻る。なのに、どうしてだろう？

シロクマが謎を解くたびに、ぼくの精神はザワザワする……。

ぼくの、このような不安に、シロクマは気づいているのだろ

うか？

謎を解いた喜びで、スキップするような足取りのシロクマ。軽やかに鬼ごっこルームのドアの前に行くと、ふり返る。そして、足をクロスさせ、体をひねるように礼をした。



探偵

それでは、また事件が起こりましたら、ご用命を——

この言葉を聞いたら、ぼくがやることは1つだ。

よろしくお願いします

持ってきていたビラを、空中に投げる。

蝶のように舞うビラ——。



そして、また新たなルームのドアが開く。

第 1 章

夏休みのはじまり



えっ？

はっきり聞こえなかったぼくは、思わず聞き返す。

「今、なんか言った？」

ここは、塾の特別クラス。そんなに広い部屋じゃない。

いるのは、ぼくを含めて5人の中学生。その中の1人——八代利香を、ぼくは見る。

「だから、みんなで遊びにいこうよって言ったの。せっかくの夏休みだよ」

彼女の口の中で、白い歯が動く。ショートカットで真っ黒に日焼けした利香は、よく男の子にまちがえられるのが悩みだっ
て言っていた。

「無理でしょ」

そっけなく答えたのは、吉永綺羅。いつカメラを向けても、ティーンズアイドル雑誌の表紙をかざる写真が撮れそうな彼女。軽くウェーブのかかった髪をかき上げる。

——それにしても、めずらしい。

彼女は、めったに口を開かない。それが、こんなふうに自分から意見を言うなんて……。

「おれは、いいと思うよ」

あくびしながら、安田一也が言う。小柄なんだけど、体全体から“元気”があふれ出している。塾のいすに座っているより、グラウンドをかけ回っていたいタイプだ。

「反対」

川畑真理夫は、テキストから顔を上げない。大きなめがねが、顔の半分を隠している。

テキストを読み、ノートに字を書く。それをしばらく繰り返



したとき、自分が言ってからだれも発言していないのに気づいたようだ。

ぼくのほうを見て、真理夫は聞いてきた。

「きみは、どうなんだい？」

——ぼく？

ぼくは……どうなんだろう？

じっくり考えようとしてるのに、それをじゃまするように利香が口を開く。

「今のところ、賛成がわたしと一也。反対が、綺羅と真理夫。2対2だから、あなたの意見で決まるのよ」

プレッシャーをかけないでほしい。

真理夫も言う。

「きみも、反対だろ。ただでさえ、きみは入院していて勉強が遅れてるんだ。遊んでるひまはないと思ってるはずだ」

勝手に、ぼくの気持ちを決めないでほしい。

「知ってるか？ 夏休みのきまりは、『夏休みらしいことをしなくちゃいけない』なんだ。これは、世界共通で決まってる。だから、夏休みらしく遊ぼうぜ」

ひとりごとのように、一也が言った。夏休みのきまりに、そんなの書いてあったっけ……？

「で、どうする？」

利香に見つめられ、ぼくは思わずうなずいていた。

「うん、いいんじゃない」

すると、真理夫が、みんなにはっきり聞こえるようなため息をついた。

「バカらしい。ぼくらは、塾の特別クラスでいっしょになった

っていうだけの関係だ。塾以外の場所で会ったり遊んだりしようとは思わないね」

言いながら、カバンにテキストなどを片付けはじめた。

確かに、真理夫の言うとおりに。一也と利香は幼なじみで同じ中学だけど、ほかのメンバーは、バラバラの中学。

おまけに、初めて会ったのは、今年の春——進学用につくられた特別クラスでだ。

「真理夫の第1志望は、栄英高校だったな」

一也が口をはさむ。栄英高校は、このへんの超進学校の1つだ。

「あそこの入試は、学力テスト以外に、ボランティア活動や交友関係も調査するって話だぜ」

「……なにが言いたい？」

「いや、おれはおまえが第1志望に受かることを願ってるよ。でも、『友達つきあいのいいヤツです』なんてうそは、つきたくないな。『遊びに誘われても勉強のほうがいじだと言って断るようなヤツです。コミュ障だから問題を起こすんじゃないでしょうか』——こんなことを言う正直者が出てこないことを祈るよ」

ほほえむ一也。

「脅迫してるのか？」

「まさか。友達として、『真理夫は、友達つきあいのいいヤツです』ってうわさを広めたいだけだよ」

逆を言えば、誘いにのらないと悪いうわさを広めるぞということだ。

「わかったよ」

カバンを投げ出す真理夫。

「これで、4対1になったわけだが——」

一也が、綺羅を見る。

肩かたをすくめる綺羅。

「わたしは、もともとどっちでもいい」

「じゃあ、決定ね」

うれしそうに、利香が手を合わせる。

イライラした口調で、真理夫が言う。

「早く、いつどこでなにをするか、決めてくれ。あと、集合場所も——」

「わたし、いい場所を知ってるよ」

利香の言葉に、みんなの視線が集まる。

「『夏休みルーム』——ここなら、わたしたちみたいに勉強でいそがしい中学生も、楽しめるわ」

スポットライトを浴びるアイドルみたいに、ポーズを決めて、利香が言った。

「夏休みルーム？ なんだ、それ？」

真理夫が首をひねる。

「夏休みを楽しむためのルーム。ほら、昔とちがって、今の子どもっていそがしいでしょ。そんなわたしたちが、手軽に夏休みを楽しむために開設されたのよ」

「へえ、そんなルームあったんだ」

ぼくがつぶやく。

「開設されたのは、最近よ。でも、すごい人気のルームなのよ」

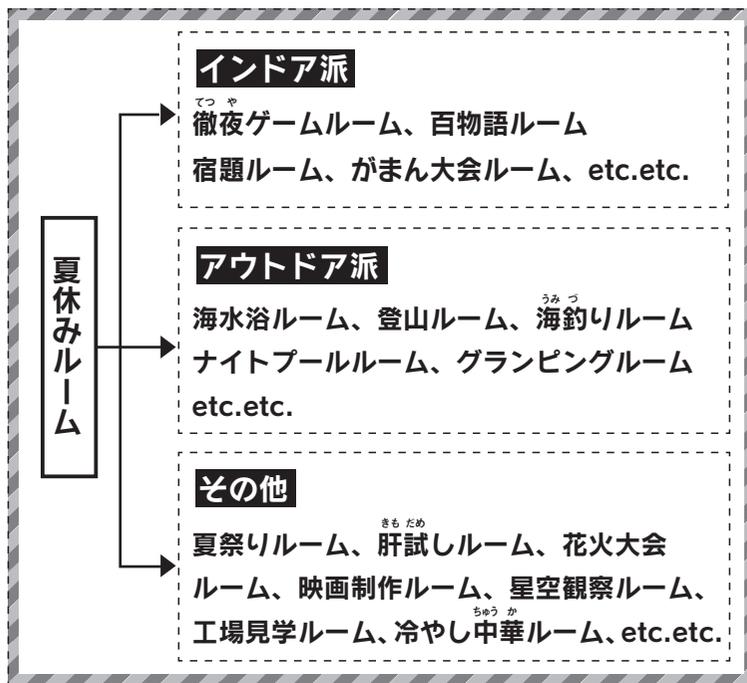
カバンからタブレット端末おんまつを出す利香。

画面にルームのHPホームページを出し、夏休みルームの案内げんさくを検索する。

夏休みルームは、いそがしい現代人に夏休みの楽しさを味わってもらうためのルームです

ポップな書体で、案内文が書かれている。

そして、その下には夏休みルーム内に設置された各種のルームしやうかいの紹介。



さまざまなルームをタップすると、くわしい内容が写真付きで紹介されている。